

Title	光太夫の女帝拝謁の時空
Author(s)	生田, 美智子
Citation	大阪外国語大学論集. 21 p.141-p.154
Issue Date	1999-09-30
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79805
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

光太夫の女帝拝謁の時空

生 田 美智子

Аудиенция Кодая у Екатерины Второй : время и место

Митико ИКУТА

Время и место аудиенции японца Кодая у Екатерины Второй-историческая загадка. Кодая, капитан японского судна, потерпевшего крушение и волею судеб прибитого к российским берегам, добился аудиенции у Екатерины, а также согласия ее предоставить ему возможность вернуться в Японию на русском корабле.

Сам Кодая свидетельствует в своих записках, что аудиенция эта была дана в Царском Селе 28 мая 1791 г. Однако описанного им помещения в Царском Селе нет и никогда не было. Кроме того, он утверждает, что аудиенция произошла в день тезоименитства наследника (при этом, видно, спутав внука Екатерины, Александра Павловича, с цесаревичем Павлом). Но нет никаких данных о том, что в указанный им день происходило какое-либо празднование.

Среди исследователей данной проблемы давно уже бытует мнение, что речь может идти о 28 июня - дне приемов по случаю именин цесаревича Павла. Однако и эта дата при сопоставлении с источниками оказывается неудовлетворительной. Мы хотим уточнить этот пункт, предложив другую дату, а именно - 29 июня. На основании записей в "Камер-фурьерском церемониальном журнале" можно утверждать, что 28 июня было днем празднования восшествия Екатерины на престол, а праздник Святых Первоверховных Петра и Павла, согласно церковному календарю, приходится именно на 29 июня, в этот день, надо думать, и прошли соответствующие приемы и разного рода аудиенции.

Причина же сдвига во времени (между датой "Журнала" и датой, названной Кодая, пролегает целый месяц), на наш взгляд, не в ошибке Кодая — он просто всякий раз пытался перевести дату с русского солнечного календаря на японский лунный.

Сложнее объяснить сдвиг места аудиенции в воспоминаниях Кодая. Как нам представляется, разгадка состоит в том, что Петергоф, где находилась Екатерина во время начало ряд событий, т. е. дворцового переворота и убийства царя Петра Третьего, как-то ассоциировался с дворцовым переворотом, поэтому Кодая сознательно заменил его на Царское Село. Ведь одной из главных его целей стало к тому времени установление добрых отношений между Россией и Японией, чему препятствовало в то время очень многое (в частности, голландцы, хотевшие удержать монополию на торговлю с Японией и поэтому сообщавшие японским властям были и небылицы о захватническом характере Российской империи и ее опасных для Яииии военных планах).

—

『おろしや国酔夢譚』という井上靖の作品を映画化した日露合作映画をご記憶の方も多だろう。構想10年、制作費45億円、総工費3億円、大規模なイルクーツクのオープンセット（東京ドームの25倍、33万坪）が宣伝文句だった。映画の中で最大の山場は、光太夫がエカテリーナ二世に拝謁するシーンだろう。光太夫に扮した緒方拳も、「劇中の大きな山場といえば、やはりマリナ・ブラディ扮するエカテリーナ二世と謁見するシーンだと思う」⁽¹⁾ と言っている。撮影は、ツァールスコエ・セロー（皇帝村）でおこなわれた。そこにあるエカテリーナ宮殿に史上初めて映画カメラが入ったと話題になった。

光太夫自身にとっても約10年におよぶ滞露生活のなかでもっとも印象に残る思い出であったのだろう。光太夫のはなしを幕府の蘭方医・桂川甫周が聞いたままに記録した『北槎聞略』において、群をぬいて詳しく描写されている。ちなみにこの『北槎聞略』が井上靖の『おろしや国酔夢譚』の種本になったのである。

女帝拝謁は光太夫の生涯のクライマックスであった。光太夫はこの拝謁により帰国の端緒をつかんだのである。ところが、不思議なことに、光太夫の証言にぴったりする空間がツァールスコエ・セロー内の宮殿がなく、後代の人々はこれを光太夫の記憶違いと説明してきた。撮影隊も困ったらしく、井上靖は拝謁の場を絵画の間と描いているが、結局拝謁の場として選ばれたのは王冠の間であった。

問題の箇所を『北槎聞略』は次のように記述している。いささか長くなるが、議論の出発点となる部分なので引用する。ただし、問題となる個所に下線をほどこす。

五月廿八日ガラフ・アレキサンドル・ウロマノウィチ・ウロンツォーフといへるエネラル・アンシュの官人より、漂人光太夫を召連参るべきの旨あるよしをキリロに達す。……光太夫は天にも升る心地にて即刻キリロに伴ひて出る。……扱も別墅の王殿は五層に造り磚はムラムラといふ石（大理石の類なり。白質にして

紅、緑、黒の斑文あり）を磨て砌成す。下の一層は内臣、侍医等の直舎なり。第二層は供膳の所。第三層を座所とす。ベズボロッコ、ウロンツォーフ兩人下層に出迎ひ、光太夫を、御前に召さるゝ間こなたへ来るべしとて先に立て、第三層に伴ひ行、キリロも後に続て出る。宮中の結構は方二十間計にて赤と緑と斑文有ムラムラにて飾り、女主の左右には侍女五、六十人花を飾りて圍繞す。其内に崑崙の女二人交り居しとぞ。又此方には執政以下の官人四百余員兩班に立わかれて、威儀堂々と排居……女帝右の御手を伸、指さきを光太夫が掌の上にそとのせらるゝを三度舐るごとくす……此書面（願状一生田）に相違なきやとありければ、キリロ仔細も候まじと答へける。時に国王ベンヤシコと宣ふ声高く聞へける。是は可憐といふ語なり。夫より執政トルツチンニノーフが妻にソファ・イワノウナといへるを以て光太夫に海上にての艱苦、また死亡せし者共の事などくはしく尋訪せらるゝ故、詳に答へ申ければ、ヲホ・ジャウコと宣ふ。これは死者を悼むの語なり。この時女王顔にやゝうれひを帯て見へける……此日は皇太孫アレキサンドル・パウロウィチの誕辰にて日中を慶賀の御膳の期と定りたる事なるに、日中の自唱鐘も過、はや未の刻に至れども御座を立給はず、いよ／＼帰国の願なりやとありける故、一向願奉る由をなげき申て其日は退出したりける。(2)

1978年、『おろしや国酔夢譚』の調査旅行でツァールスコエ・セローを訪れた作家、井上靖は、全体としての『北槎聞略』の記述が「驚くべき正確さで貫かれている」ことを評価しながらも、この拝謁場面の記述については、次のように異議を申し立てている。

『北槎聞略』のこの記述は事実と異っている。離宮は実際には三階建てで、地階に一層があるが、それを加えても四層である。……

この宮殿の、女帝の座所である二階には五十五の部屋があり、それぞれの扉を開くと、三百メートルの長い廊下になるように造られている。……いくつ目かに、この宮殿で最も広い部屋一王冠の間がある。

この部屋は千平方メートルの広さで、「聞略」の記述にあるような何百人かの者が居る部屋となると、さしずめこの部屋しかない。しかし、この部屋はもともと全面金箔で飾られ、木彫りの柱にも、壁面にも金箔が塗られてあり、その他には大きな鏡があるだけである。もし光太夫がここに通されたとしたら、その場合は圧倒的に黄金の印象しか受けないはずである。……六つ目の絵画の間は、この宮殿で二番目に広い部屋であり、光太夫が女帝に謁した部屋を、この絵画の間とする推定が最も当を得ているのではないと思われる。……この部屋にぐるまに赤柱の間、緑柱の間を通過するので、赤と緑の斑文あるムラムラ（大理石）で造ってある宮殿といった印象を受けても不思議はない。……この絵画の部屋は王冠の間に次ぐ第二の広さを持つ部屋であるが、それにしても、侍女五、六十人はいいとして、官人四百余人が居ることはできない。光太夫の気が動揺して、そのような錯覚をもつ

たのであるか、あるいは四百人の官人は部屋の内部ではなくて、廊下に居流れていたのかもしれない。⁽³⁾

井上は光太夫の気が動顛していたので、拝謁の正確な印象をもつことができなかったと言っている。ところが『北槎聞略』の断片から浮かび上がってくる光太夫の姿は、動顛するどころか沈着そのものである。

帰国出来るか否かはこの日の謁見の成否にかかっていた。運命の分かれ目となる拝謁で光太夫は、針鼠のように全身にアンテナをはりめぐらせ、聴覚と視覚、触覚を駆使し、エカテリーナが発信するメッセージをすべてキャッチし、的確に反応しようとする。彼はエカテリーナの顔の表情を読みとり（この時女王顔にやゝうれひを帯て見へける）、声の表情を読みとり（時に国王ベンヤシコと宣ふ声高く聞へける）、仕草も読みとっている（女帝右の御手を伸、指さきを光太夫が掌の上にそとのせらるゝ）。気が動顛しては、とてもこれだけの観察ができるものではない。光太夫は難破しロシアに漂着して九死に一生を得、しかも鎖国の世に帰国できた人である。このように運命の分かれ目においても沈着、冷静に判断できる人間が拝謁の時空をまちがえるということがありえるだろうか。

むしろ逆に彼の空間描写は正確であると見たほうがいいのではないだろうか。それと場所名との食い違いは単なる錯覚というより別の狙いがあったものと考えたほうが良いのではないだろうか。拝謁の日時についても同様のことが言えるのではないだろうか。

以下、そのことを日時、場所の順で検討してみよう。

二

「光太夫錯誤説」の口火をきったのはロシアの歴史学者コンスタンチーフであった。彼は光太夫関係の記録である江戸時代の写本『魯齊亜国睡夢談』をロシア語に翻訳し、注釈をつけて原文を影印出版するに際し、ロシア側の資料で光太夫の証言を検証したのである。ロシアの宮廷にはエカテリーナ二世の日課を丹念に記録した『宮中儀典日誌』というのがあり、それを調べたコンスタンチーフは拝謁場面について次のような注をつけている。

最初の謁見はペテルブルグではなく、ツァールスコエ・セローにあるエカテリーナの夏の離宮で、1791年6月28/7月1日におこなわれた。……桂川甫周の作品『北槎聞略』では最初の拝謁は5月28日に行われたと語られているが、誤記であろう。資料を再度点検したところ、最初の拝謁は6月28日におこなわれたことが確定した。1791年度の『宮中儀典日誌』は、エカテリーナ二世はツァールスコエ・セローに5月1日に入り、6月28日と29日にツァールスコエ・セローの宮殿で皇太子パーヴェルの名の日（祝）とエカテリーナ二世即位の祝いにちなんだ大レセプションがあったことを裏付けている。光太夫は謁見は皇位継承者の名の日に行われたと言っていた。⁽⁴⁾

コンスタンチーノフは拝謁はツァールスコエ・セローで1791年6月28日におこなわれたと特定している（6月28日は露暦で、7月1日は新暦）。彼が根拠とするのは、拝謁は皇太孫の誕生日に当たっていたという光太夫の証言である。それに対応するものとして皇太子パーヴェルの名の日の祝い（自分の洗礼名となっている聖者の祭日）をもちだしている。

しかし、パーヴェルの名の日を根拠にするのであれば、拝謁の日時は6月29日になるはずである。『宮中儀典日誌』を見るまでもなく、ロシア正教に無関心でなければ、「聖使徒ペートル・パーヴェル祭」が6月29日にあることは分かるはずである。

しかも、6月28日は、エカテリーナが宮廷クーデターをおこし、夫ピョートル三世を廃して、即位した日としてこれまた歴史上有名な日時である。なぜこれほど有名な日時が逆転したのか、理解に苦しむ。教会や帝室を軽んじてきたソ連時代の社会のあり方がこんな所に露呈したのであろうか。いずれにせよ、これ以後は、「6月28日・ツァールスコエ・セロー説」が通説となる。

精力的に光太夫を追ってきたコンスタンチーノフは1967年、64歳で帰らぬ人となる。1978年、『北槎聞略』のロシア語訳が死後出版される。そこには、次のような注が付されていた。

清書した人もしくは光太夫の間違い。光太夫は6月28日にエカテリーナ二世に最初の拝謁を賜っている。1791年の『宮中儀典日誌』は、6月28日と6月29日はペテルゴフ宮殿で皇太子パーヴェルの名の日の祝いとエカテリーナ二世即位日にちなんだ大レセプションがあったことを裏付けている。光太夫は、拝謁は皇位継承者の名の日におこなわれたと言っていた。その際光太夫は皇位継承者として、エカテリーナの息子パーヴェルではなく、孫のアレクサンドル・パヴロヴィチの名をあげるという間違いをおかしたのであろう。⁽⁵⁾

コンスタンチーノフは拝謁の日時は相変わらず、6月28日であるが、拝謁の場所はペテルゴフ宮殿であったと指摘している。ちなみに、ツァールスコエ・セローがペテルブルグから南へ約30キロ行った所にある離宮であるのに対し、ペテルゴフはペテルブルグの西29キロ、フィンランド湾に面したところに位置する離宮である。これは大きな修正であるが、後の人々はコンスタンチーノフの訂正に気づかなかっただろう。

ソ連時代、ペテルゴフという語は廃語となっていた。1944年対ドイツ戦争の時に、敵性語であるドイツ語を髣髴とさせるというので、ロシア風に「ペテロドヴォレーツ」と改称させられたからである。コンスタンチーノフはペテルブルグの人間ではないので、ペトロドヴォレーツとペテルゴフが同じものであるとは気づかなかっただろうか。拝謁場所名を変更したことについて何の説明もしていないところを見ると、ペテルゴフ宮殿がツァールスコエ・セロー内にある宮殿であると勘違いしたとしか考えられない。

岩波文庫の『北槎聞略』は、それまで研究者や好事家にしか読まれなかった『北槎聞略』を一躍有名にさせるのに一役買った。日露文化交渉の分野に大きな足跡をのこした高野明が詳細な注を付けたことも『北槎聞略』を普及させる上で大きな役割を演じた。拝謁の時空に

ついて、どうなっているのか見ておこう。

コンスタンチーノフの注記によれば、これは六月二十八日の誤記である。当時の『宮廷行事記録・一七九一年版』によれば、六月二十八、二十九の両日が、皇太子パーヴェルの「名の日」とエカチェリーナ女帝即位記念日にあたり、このとき光太夫の第一回の謁見がおこなわれた。⁽⁶⁾

高野明は自分が巻末につけた注はコンスタンチーノフの手になる露訳『北槎聞略』のロシア語訳・注釈書の成果を全面的にとりいれたものであると、出典を明記している。これはわれわれが引用した死の直前のコメントのことである。6月28日に名の日⁽⁷⁾の祝い、29日に即位の祝いがあったかのような記述方法にいたるまでコンスタンチーノフの注を踏襲しているが、元のコメントに含まれていた場所に関する情報（ペテルゴフ宮殿）を削除し、場所名については何の指摘もない。『北槎聞略』の本文中で光太夫自身が初めての拝謁はツァールスコエ・セローで行われたと言っているのも、それとの整合性をもたせたのであろうか。いずれにせよ、この沈黙は、現在に至るも光太夫のエカテリーナ女帝拝謁に関して、「6月28日・ツァールスコエ・セロー説」が信じられる遠因となった。

光太夫は一体いつ、どこでエカテリーナに拝謁したのであろうか。

三

現在のわれわれは『宮中儀典日誌』⁽⁷⁾を読むことができる。「エカテリーナ即位記念日」と「皇太子パーヴェルの名の日⁽⁷⁾の祝い」が逆転しているかどうか、再調査する必要があるだろう。拝謁の日時は光太夫の名前を頼りに探せば簡単に特定できそうに思われたが、『宮中儀典日誌』を調べたところ、光太夫に関する記述は一切見られない。我々にとっては世紀の拝謁でも、日誌をつけた侍従にとっては記録するに値しないエピソードであったのであろう。

だが、光太夫はエカテリーナ女帝から下賜された金牌を將軍徳川家齊上覧の際に首にかけていたし、それは『北槎聞略』の挿し絵にも描かれている。また、所有者としての光太夫の名前が入った浄瑠璃本等は女帝から帝室アカデミーに下賜された蔵書として現在ペテルブルグの東洋学研究所に保存されている。それに、何よりも女帝の鶴の一声で送還が実現したことを考えると、拝謁をほら話として一笑に付すことはできないであろう。

光太夫の名前から拝謁の時空を割り出すことはできない。残された方法は光太夫の証言と『宮中儀典日誌』の記述をつぎあわせて時空を特定することであろう。

まず、光太夫自身が特定してみせた5月28日は『宮中儀典日誌』によれば、ほとんど行事らしい行事のない日である。この日であれば女帝はツァールスコエ・セローに滞在しているが、400人余りの官人が女帝の回りにいたという記述やこの日が皇太孫の誕生日にあたっていたという記述とあわない。

光太夫がペテルグに滞在した期間で、この条件をみたすのは6月29日である。

『宮中儀典日誌』によれば、6月26日、女帝はツァールスコエ・セローを出発してペテルゴフに入っている。ピョートル大帝が北方戦争勝利を記念するモニュメントとしてベルサイユにまさる宮殿を建設したいと建てられたペテルゴフ宮殿は豪壮な外観をもつ、格の高い宮殿である。冬宮を留守にする夏期はここで、国家行事が行われたという。高官たちも6月27日の晩から続々とペテルゴフに到着していた。28日、29日と連続で行われる大レセプションに参列するためである。

予想通り、『宮中儀典日誌』でも、28日が「エカテリーナ即位記念日」、29日が「皇太子パーヴェルの名の日」になっている。光太夫の記述に対応するのは29日である。

29日は実際には、皇太孫アレクサンドルの誕生日ではなく、皇太子パーヴェルの「名の日」だった。だが、この混同は大いにあり得る。パーヴェルはエカテリーナ二世の実子であるが、そりがあわず、エカテリーナは自ら手塩にかけて育てた孫のアレクサンドルを溺愛し、彼を皇位継承者と目していた。光太夫はこのような宮廷の気配を察し、孫の方を皇位継承者と受け取ったのであろう。誕生日はこの世に生をうけた日であり、名の日は、いわばキリスト教徒として生をうけた日であり、いずれも生誕と結びついた行事である。名の日と誕生日を混同することはおかしやうい間違である。

われわれが拝謁の日時を29日とみなす今ひとつ理由は、光太夫の拝謁が未^{ひつじ}の刻（現在の午後1時～3時）に至るまでに行われているからである。28日であればその時間帯は光太夫と後見人ラクスマンの官位（7等官）からして拝謁を許されるとは考えにくい。というのは、政府高官（1等官から5等官）や帝室会議のメンバー、軍の高官、外国公使の拝謁が行われたからである。拝謁時における国王の身体は国家権力の具現であり、拝謁の席次をおかすことは考えられない。ドイツ人でありながら、宮廷クーデターで帝位についたエカテリーナは、周囲の反感を買わないよう、万事にわたって慎重に行動しなければならないことを知っていた。29日であれば、女帝はその時間帯に六等官以下の官吏、および一般の参列者全員に拝謁を許している。その時であれば、席次をおかすことなく、反感をかうこともなく、光太夫も拝謁が受けられる。

以上のことから、拝謁の日時は、これまで考えられてきたように、6月28日ではなく、6月29日とすべきである。

四

井上靖は、拝謁がツァールスコエ・セローで行われたと仮定して、光太夫錯誤説を展開した。拝謁の時空の座標が変わった今、井上靖が問題とした点を取り上げて、光太夫の弁護をしておきたい。

井上の批判は次の三つの光太夫発言にむけられていた。すなわち、「別墅の王殿は五層」、「官人四百余員両班に立ちわかれ」、「赤と緑の斑文有るムラムラにて飾り」である。

まず、「別墅の王殿は五層」という証言から検討してみよう。ピョートル大帝により建設されたペテルゴフの敷地には幾つもの宮殿、庭、噴水がくみこまれている。1982年の資料では

その総面積は1500ヘクターである。⁽⁸⁾ 『宮中儀典日誌』によれば、拝謁がおこなわれたのは、「上の宮殿」である。これは現在では「大宮殿」といわれるメイン宮殿で、300メートルもある宮殿の正面は壮観である。⁽⁹⁾ 私の手元には、エカテリーナ時代の大宮殿の絵および現在の大宮殿の写真がある。いずれも3階建てである。上の宮殿は上方にある「上手公園」と下方のフィンランド湾と接する「下手公園」をもつ。フィンランド湾から段々に高くなるテラス状の地形を利用して宮殿が建てられたので、下手公園側から「上の宮殿」に光太夫が入ったとすれば、階段をさらにのぼらなければならないので、5階建ての印象をうけても不思議ではない。

今一つ、5階建てという光太夫の空間認識の謎を解く一つのヒントとして、冬宮（現在のエルミタージュ美術館、3階建て）でアレクサンドル二世に謁見を許され、帰国後その経験を語った仙台漂流民・津太夫の証言を引用しておく。その時のもようを『環海異聞』は次のように、記している。

宮殿一体五階作りの由。一階毎に硝子障子あり。外より望み見るに、其窓にて五階の事追々知れしなり。大門の幅、乗車五輦並へて自由に通行なる程也。案内の役人付て何れも殿中へ入りしに、爪先キ上りに自然と高く^{のぼ}る様に覺ゆ。故に幾階といふ事は知れかたし。⁽¹⁰⁾

津太夫も3階建を5階建と誤認していることに注目したい。このような空間認識を惹起した犯人は、引用したテキストから明らかなように、宮殿の窓と折れ曲がり階段である。

宮殿は上下二段窓が普通である。窓の上にさらに、装飾と明かりとりをかねて、もうひとつ窓を設けるので、外から建物を見た場合日本人は何階あるか判断に苦しむ。

その上、宮殿内の階段は直線型の階段ではなく、折れ曲がり階段で、途中に踊り場がある。しかも、踊り場の部分で90度向きがかわり、この部分がフロアのように広がっている。津太夫たちは勾配のゆるやかな折れ曲がり階段をぐるぐるまわっているうちに、「幾階といふ事は知れかたし」という状態に陥る。後に外から眺め、窓を見て判断し、5階のように錯視したのである。

次に「官人四百余員^{きんふたばん}両班に立ちわかれ」という光太夫の証言を検証してみよう。『宮中儀典日誌』によれば、6月29日、儀式用食堂では124人分の食卓が用意された。「上の宮殿」は、部屋数、部屋の規模、インテリアの変更を伴う増改築を何度もくりかえしているの、18世紀当時の儀式用食堂の広さがどのようなものであったか分からない、しかし、女帝が臨席する食卓に招待されたのは、高位聖職者、近衛連隊長、一等官から五等官の高官たちだけである。つまり、女帝と共に食事をした人が124人である。6月29日の拝謁には6等官以下の人々もおとずれたので、それらの人々もあわせると四百人が拝謁会場で起立した状態でいてもおかしくない。1791年にポチョムキンがタヴリダ宮殿で催した晩餐会には3000人が招待されたという有名な話がある。タヴリダ宮殿で3000人収容できるのであれば、上の宮殿の規模から考えて400人という数字は、蓋然性のある数値と言える。

第三に「赤と緑の斑文^{ちえび まだらある}有るムラムラにて飾り」という記述を検討しよう。ペテルゴフの中心的建物である「上の宮殿」は、1714年に建設が開始され、1725年に完成した。以来、内部は何度も増改築を繰り返している。現在「白い食堂」といわれる食堂は1770年建築家フェリテンにより建設された。だが、1845～50年にはシタケンシネイデルにより、インテリアは言うに及ばず、部屋数や部屋のサイズの変更をとまなう大改築がおこなわれている。さらに、第二次世界大戦で大宮殿はほぼ全壊し、壁だけが残ったという。現在ではほとんどの部分が復旧されているが、18世紀に、赤と緑のまだらの大理石の飾りがあったか否か、現在検証することは困難である。

以上のように、第三の点に関しては間違っているともいないとも言えないが、第一と第二の点から、光太夫の空間記述は、拝謁の時空を6月29日・ペテルゴフと設定した場合、錯誤と言いきれないことが分かる。

五

では、なぜ、日時と場所名が異なっているのでしょうか。まず日時をみてみよう。

光太夫は実際には6月29日に行われた拝謁の日時を5月28日とした。この開きが意味するのは何か。単なる書き間違えか、意図的なものか。

『北槎聞略』にはきわめて克明に年月が記されている。じっと眺めていると、興味深い事実気づく。すなわち元号が記入されているのは、遭難した天明二年と生還した寛政四年のみで、あとは辛亥十一月二六日のように、十千十二支が付されている。露暦で用いられるように四桁数字の表記方、たとえば1783年タイプの表記も、光太夫自身の話においてはまったく使用されていない。ただし、桂川甫周が本文中に注の形でつけた解説文には見られる。これは甫周がオランダの文献に依拠したことによる。

暦は毎年発行されるものである。江戸時代には閏月があったが、それがどこに来るか、その年の暦をみなければわからなかった。十年の漂泊生活の間、月日に関しては光太夫はどうしていたのであろうか。

無人島に漂着したロビンソン・クルーソーがしたように、漂流何日目と、リニアに日を刻んでいったのだろうか。彼は間断なく続く時間と空間の延長線上に、ロシア領アムチトカ島に漂着した。光太夫はまもなく時の流れを刻む時刻の座標軸が違うことに気づいたはずである。時刻は他者との社会関係を律する上で欠かすことのできないものだからである。ここが無人島に漂着し、自文化を無人島に持ちこんだたロビンソン・クルーソーとのちがいである。

『北槎聞略』にある彼の証言から、光太夫には和暦と露暦の差が一ヶ月ばかりあるという認識があったということが分かる。

正月は大抵この方の十一月末、十二月の初^{はじめ}にあたる。⁽⁴⁾

1ヶ月も開きのある二つの暦のうちいずれのものを使用していたのであろうか。『北槎異聞』に次のような証言がある。

申辰（1784年－生田）の後是日（1792年9月3日－生田）までは彼国の暦を以て記す。⁽¹²⁾

すなわち遭難した年である1783年と翌年まで太陰暦の和暦を採用し、以後は露暦に切り換え、日本帰還後は再び和暦を使用したらしい。

甫周が光太夫のもとに取材に通い出したのは、1793年9月22日のことである。⁽¹³⁾ 光太夫はこの時、すでに和暦を再び利用していた。だが、描写対象である事柄が生じたときには露暦を使用していた。幕府献上本である『北槎聞略』が想定していた読者は將軍徳川家斉と幕閣である。時間軸を露暦から和暦に変換する必要があったであろう。

光太夫が時間軸の切り替えをしていたことは、客観的に日時が特定できる行事の日付をどう扱っているかで見えてくる。たとえば、光太夫は5月9日の「聖ニコライの聖骸移遷の日」を4月とし、8月30日の「アレクサンドル・ネフスキーの聖骸移遷の日」を7月にしている。

和暦から露暦への翻訳の努力は認められるものの、その際、時間の交換比率にばらつきがみられるのは、暦の換算が容易ではないからである。日本に長期滞在し、蘭和辞典を編纂した長崎のオランダ商館長ヘンドリック・ドーフの証言を引用しておこう。

正確なる時日は定め難し。何となれば日本人は大陰暦にて計算し、一ヶ月は交互に二十九日又は三十日となし、三十三ヶ月の後には閏月生じて一年は十三ヶ月となればなり。⁽¹⁴⁾

ドーフが問題にしているのは、和暦とグレゴリー暦の関係であるが、和暦と露暦（ユリウス暦）についても同様の困難を指摘できる。

拝謁場面における1ヶ月と1日のずらしは錯誤ではなく、意識的に出来事を日本の時間枠でとらえようとしていることを示唆しているように思われる。

拝謁場面の時間軸が和暦に設定されていた証拠として、引用した断片にあった「未^{ひつじ}の刻」という光太夫の言葉を思い出していただきたい。ロシアは1日を24等分し、日本は1日を12に刻む。1刻は2時間に相当し、未の刻は午後1時～3時にあたる。すなわち、露暦の時間におけるずらしは露暦から和暦への時間軸の切り替えであった。

六

それにしても何故、場所名をペテルゴフでなくツァールスコエ・セローにする必要があったのか。光太夫は、当局にロシア情報を提示する際に情報操作をしていたことを思い出そう。

たとえば、露土戦争。光太夫には配達されなかった手紙がある、彼は少なくとも五通以上の手紙を祖国に書き送ったらしいが、いずれも配達されなかった。だがそのうちの一通がドイツのゲッティンゲン大学に今も残っている。その文面については、次のような驚くべき一節がある。

今此国ハいくさのさい中二而、殊ノ外やかましく候。(15)

すなわち、光太夫は私信の中では戦争中で騒然としていると言っている。その光太夫が、幕府役人の質問に対し、次のように平然と言っているのけるのである。

問 彼王城に在しうち、王城及外の郡縣より大人衆出すなどゝと云ことなかりしや。
又他邦遠地にても、戦争あると云聞へも無りしや。

對 如是のこと絶てなし。遠方にも聞へず、又近年に在とも聞ず。彼国の今の勢ひ、人の風にては、戦闘など云ことあるべしと思はれず、人気がにものろく、ゆるやか也。且他国の^{きん}鼻をうかゞふなど云やうの事絶て見へず。人々さやうの事は一向度外にして居る也。又他邦に備へて用心する體もあらず。(16)

ロシアで戦争があるかという役人の質問に対し、光太夫はロシアでは、戦争は絶えてないし、人ものんびりしていると答えている。実際はどうなのか。ロシアの歴史学者クルチェフスキーはエカテリーナ時代のロシアについて次のようなことを言っている。

彼女は、自分の三十四年間の治世中に、ロシアをほとんど全ての西欧の大国と争わせ、わが国の歴史に最も血なまぐさい統治の一つをもちこみ、ヨーロッパで六つの戦争をやったのけ、死を前にして第七番目のそれ（革命フランスとの）の準備をしていた。(17)

桂川甫周は幕府の蘭方医として、露土戦争のことを知っていたはずである。光太夫がペテルブルグ滞在中に出くわした露土戦争（1787～1791年）についての報告は、天明八年（1788年）のオランダ風説書、寛政元年（1789年）、寛政二年（1790年）、寛政四年（1792年）、寛政五年（1793年）の風説書でとりあげられているからである。(18)

『北槎聞略』は、露土戦争に関しては口をつぐんでいるし、ポチョムキンのトルコ派遣の経緯をめぐる表現もきわめて抑えのきいたものである。

この人去年^{ごとう}宮事にて都爾格国^{トルコ}に行て翌年^{きふし}帰りし故、光太夫が行たる頃にこの祭ありしなり。(19)

ポチョムキンは当時ロシア帝国の陸軍元帥と海軍元帥を兼務し、対トルコ戦の総司令官だった人物である。『北槎聞略』は彼のトルコ遠征の理由を「官事にて」と婉曲表現することで、意識的にロシアが戦闘状況にあることをぼかしている。

また、将軍徳川家斉上覧の際の事情聴取でも、光太夫は次のような証言をしている。

問 出〔出羽守〕

武芸は稽古致し候哉。

答

右の体、一向見及び申さず候。足輕体の人の鉄砲炮稽古仕り候を、見物仕り候、専ら足の踏みやうをならひ申し候、弓は侍のもち候は見及び申さず候、獵師のもち候を見懸け申し候、至って麓末なるものにて、やはり蝦夷人の弓同様に御座候、刃物にはなはだ鈍く、一向に切れ申さず候⁽²⁰⁾

武芸は稽古しているかとの問いに対しても、見たこともなく、もっぱら「足の踏みやうをならひ申し候」と答え、弓は至って粗末なものだし、刃物は鈍くて切れないと、聞かれないことまで付け加え、うそぶいている。

このような文脈にペテルゴフを置くと、浮かび上がってくるのは、1762年のクーデター劇である。その当時エカテリーナは夫ピョートル三世の命令でペテルゴフに住んでいた。1762年、ピョートル三世は6月29日、自分の名の日の祝宴（聖使徒ペートル・パーヴェル祭）をペテルゴフで祝う際に、エリザヴェータ・ヴォロンツォーフとの結婚の妨げとなっているエカテリーナに片をつける気であつたらしい。危険を察知したエカテリーナは先手をとって、ペテルゴフを脱出、三つの近衛連隊の忠誠を確認した上で、ペテルブルグのネフスキ大通りにあるカザン大聖堂でエカテリーナ二世として即位することを宣誓した。6月28日のことだった。こうして宮廷クーデターは成功する。まもなく廃位された夫ピョートルはエカテリーナの寵臣グリゴリイ・オルロフの弟アレクセイにより不審な死に方をし、エカテリーナは夫殺しと皇位篡奪者の噂に悩まされる。

エカテリーナは、終生ペテルゴフを嫌い、34年間の在位のうちペテルゴフに滞在したのは、わずか555日である。光太夫が拝謁した1791年も7日しか滞在していない。このように、ペテルゴフにはクーデターのイメージがまわりついていたので、不穏なロシアの印象を与える恐れがあった。

光太夫はペテルゴフについては「花園」とし、噴水の記述はあるものの、あれほど豪壮な宮殿のことには触れていない。また、エカテリーナ二世即位の経緯についても何も語っていない。当時日本でトップクラスのロシア通であった桂川甫周はエカテリーナに付した注で、ピョートル三世が多くの日を経ないうちに崩じたので、皇后がその位を受け継いだと記すのみである。

七

『北槎聞略』は、しばしば18世紀の百科事典だと言われる。その情報の正確さは今日でも脅威的である。だが、『北槎聞略』はそれにとどまらず、日本とロシアの関係改善を狙った書でもあった。『北槎聞略』には次のような注目すべき一節がある。

キリコおよび今度来れる^{ばんし}藩使等が説に、日本国^{こく}国体、^{ふうきょう}風教、礼儀、衣服、制度に至るまで殊に全美^{ぜんび}にして議すべき所あらず。そのうへ軍事、武備^{ぶひ}整り、武芸の精鍊なるに至りては諸国のおよぶべきにあらず。刀劍弓矢^{とうけんきゅうし}の制作器械の良好なる、実に万国に冠たり。然るに外洋の諸国を畏怖し、我魯西亜をも懼れ憚るゝと聞およべり。大に謂^{いわ}れなき事といふべし。これしかしながら和蘭^{おらん}国人等久しく貴国に通商し、その貨物を諸国に市易す。もし諸国より貴国に通信互市の事あらば其利を失はむ事をいめる根なし言より起りしなるべし。これ其本外洋人たゞ支那と和蘭のみ通商を許されて其他諸国の船^{ふね}を入られず、また外邦^{がいほう}へ船をも出されず、外国の形勢、事理、情実^{じやうじつ}を詳にせられざるよりしてさのごとく畏怖せらるゝなるべし。貴国人物制度の全備もとより外国の輕侮をうくべからざる事は上にいふ所のごとし。足下国に帰るの後よく此事理をもて貴国の人々に告知^{こくし}しむべしといひしとぞ。⁽²¹⁾

光太夫にインタビューして『北槎聞略』を完成させた桂川甫周は、林子平の『三国通覧図説』に序文を書いた人物である。この本は、発禁処分になり、著者の林子平と書肆の須原屋市兵衛が処罰される事態をひきおこした。そこに代々將軍家の侍医をつとめる桂川家の長男でありながら絶大な賛辞をかいいたのである。1786年のことであった。甫周もロシアに関し一家言をもつ人物だった。

光太夫は絶海の孤島のようなロシア領アムチトカ島に漂着しながら、ロシア本土に渡り、シベリア大陸を横断、エカテリーナに直訴し初めて日本に生還した人物である。薬草園に留め置かれても、これで自分の一生は終わったとは思わなかったであろう。世界を見てきた光太夫は日本が鎖国から開国の途上にあることを感じていたであろう。自分が架け橋となってロシアと交易が開始された暁には、語学力や商才をいかすことも夢見ていたかもしれない。

光太夫は、何はともあれ当時の日本人が抱いていた「ロシア＝赤賊」イメージを払拭しなければならなかった。そしてロシアを平和な国として提示する必要があった。拝謁の場の操作はその目的にそうものではなかったのだろうか。そのような操作が可能であったのは、桂川甫周という願ってもない人物をえたからでもあった。

(1) 『おろしや国酔夢譚』別冊毎日グラフ、1992年、71頁。

(2) 桂川甫周著・亀井高孝校訂『北槎聞略』岩波文庫、1991年、52～53頁。

(3) 『井上靖エッセイ全集第5巻』学習研究社、1983年、451～453頁。

(4) Оросиякоку суймудан (Сны о России). М. 1961. С. 94

- (5) Кацурагава Хосю. Краткие вести о скитаниях в северных водах. М. 1978. С. 343.
- (6) 岩波文庫、『北槎聞略』、395頁。
- (7) Камер-фурьерский церемониальный журнал за 1791 год.
- (8) И. М. Гуревич и др. Петродворец Л. 1982. С. 1.
- (9) Там же. С. 6.
- (10) 大槻玄沢・志村弘強編・杉本つとむ他解説『環海異聞・本文と研究』八坂書房、1986年、284頁。
- (11) 岩波文庫『北槎聞略』、146頁。
- (12) 篠本兼『北槎異聞』、大友喜作『北門叢書第6冊』、国書刊行会、1972年、111頁。
- (13) 今泉源吉『蘭学の家桂川の人々』、第1巻、篠崎書林、1965年、360頁。
- (14) ヴーフ著、斉藤阿具訳注『日本回想録』、異国叢書、雄松堂、1928年、43頁。
- (15) 亀井高孝『大黒屋光太夫』、吉川弘文館、1964年、175～176頁。
- (16) 篠本兼『北槎異聞』、145～146頁。
- (17) В. О. Крючьевский著・八重樫喬任訳『ロシア史講和5』、垣文社、1983年、77頁。
- (18) 日蘭学界・法政蘭学研究会編・岩生成一編『和蘭風説諸集成』下巻、吉川弘文館、1979年、94～95頁。
- (19) 岩波文庫『北槎聞略』、204頁。
- (20) 山下垣夫再編・石井研堂コレクション『江戸漂流記総集第三巻』、日本評論社、1992年、103頁。
- (21) 岩波文庫『北槎聞略』、249頁。

(1999.5.12 受理)

引用に際しては、適宜ルビを補ったり、省略したりした。
また返り点は省略した。